

協同学習を取り入れた中学校英語科の授業改善

江利川 春雄（教育学部・代表）、大野 傑（和歌山県立向陽中学校）

菊池 有紗（附属中学校）、高瀬 麻美子（附属中学校）、元岡 未薫（附属中学校）

1. 本研究の目的と意義

本研究の目的は、中学校英語科を主な対象に、協同学習（collaborative learning / 協働学習）を取り入れた授業改善の方法、成果、課題を明らかにすることである。

2020 年度から施行される新学習指導要領のキーワードである「主体的・対話的で深い学び」を実現する上で、協同学習は大きな可能性を秘めている。協同学習とは、「少人数集団で自分と仲間の学びを最大限に高め合い、全員の学力と人間関係力を育て合う教育の原理と方法」（江利川春雄編著『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店、2012）である。

協同学習は、世界的に進行する「21 世紀型学力」のキー概念の一つとなっており、日本においても授業改善の切り札として本格的に実施されつつある。OECD（経済協力開発機構）が提唱する「3つのキー・コンピテンシー」の筆頭には「異質な集団で交流する」能力が掲げられ、その構成要素は、①他者とうまく関わる、②協働する、③紛争を処理、解決する能力である。

OECD が 2015 年に実施した PISA（15 歳生徒の学習到達度調査）では、「協同的問題解決能力」が初めて導入された。これは、3 人がコンピュータを用いてチャット形式で協同しながら、架空の国の地理、人口、経済等についての問題に答えていく試験である（ただし、社会・文化背景の異なる各国の学力を標準化・順位付けすることは不可能かつ危険であり、PISA には問題も多い）。

今後の学力観を展望した OECD の Education 2030 では「社会を変革し、未来を作り上げていくためのコンピテンシー」（Transform Competency）へと発展している。概要は、①他者との協力と協働により既存の知識から新しい知識を生み出す力、②対立やジレンマを克服する力、③責任ある行動をとる力で、やはり冒頭で「他者との協力と協働」を強調している。

協同学習が求められる背景には、学習環境の変容もある。生徒の多くがスマートフォンや ICT 機器を利用し、人工知能（AI）の普及が著しい今日の知識基盤社会においては、教師主導の Calk & Talk による講義・解説型の授業スタイルから、学習者同士が協同しながら、主体的に学修に取り組んでいく協同学習へと、授業を転換させる必要が急務となっている。

2. 2019 年度の活動概要

（1）主な共同研究会、研究発表、講演活動など

2019 年度は「協同学習を取り入れた中学校英語科の授業改善に関する共同研究会」（全体会）を 2 回開催し、メンバー各自の研究・実践・講演等を以下のように行った。

○ 2019 年 6 月 8 日（土） 新英語教育研究会和歌山支部研修会で大野が『『教えない授業』の実

践報告」と題した研究発表を行った。

- 6月26日（水） 和歌山大学教育学部附属中学校の公開研修会で、江利川が「主体的・協働的な学びの授業づくり」と題した講演を行った。
- 7月26日（金） 第1回協同学習共同研究会（全体会）を和歌山大学教育学部で開催し、共同研究者全員と英語教育専攻の学部生・院生が参加した。
- 8月11日（日） 長崎県高等学校教職員組合教育研究集会で、江利川が「教育の市場化を超え協働的な学びへ」と題した講演を行った。
- 8月20日（火） 和歌山県田辺・西牟婁中学校英語教育研究会で江利川が「子ども全員をハッピーにする協働的な英語授業づくり」と題した講演・ワークショップを行った。
- 8月21日（水） 奈良県立登美ヶ丘高等学校の教員研修会で、江利川が「生徒の発信力を向上させる主体的・協働的な英語授業づくり」と題した講演・ワークショップを行った。
- 10月9日（水） 河内長野市中学校英語研究会で、江利川が「生徒の主体性を育てる協働的な英語授業づくり」と題した講演・ワークショップを行った。
- 10月30日（水） 高槻市立第十中学校公開研究発表会で、江利川が「主体的・対話的で深い学びを全員に育てる」と題した講演を行った。
- 11月1日（金） 附属中学校で公開授業研修会が開催され、菊池有紗、高瀬麻美子、元岡未薫が公開授業および研究協議を行った。
- 11月11日（月） 大阪府泉南郡中学校英語教育研究会で、江利川が「主体的・対話的で深い学びへの協働的な英語授業づくり」と題した講演・ワークショップを行った。
- 11月18日（月） 兵庫県高等学校英語教育研究会淡路支部大会で、江利川が「英語科における協同学習の進め方」と題した講演・ワークショップを行った。
- 11月29日（金） 広島大学附属中・高校教育研究大会で、江利川が「人との関わりの中で学びを創造する子どもたち」と題した講演を行った。
- 12月2日（月） 和歌山県東牟婁地方中学校・高校英語教員研修会で、江利川が「生徒の主体性を引き出す協働的な英語授業づくり」と題した講演・ワークショップを行った。
- 12月11日（水） 兵庫県高校英語教育研究会播磨支部大会で、江利川が「主体的・対話的で深い学びを実践する授業改善の提案」と題した講演・ワークショップを行った。
- 12月14日（土） 新英語教育研究会和歌山支部研修会で大野が「協同学習の理念に基づいた宿題」と題した研究発表を行った。
- 2020年1月17日（金） 第2回共同研究会（全体会）を和歌山大学教育学部で開催し、共同研究者全員と英語教育専攻の学部生・院生が参加した。



学生を交えた共同研究会（2020.1.18 和大）

3. 中学校における研究・実践の事例（概要）

○ジグソー法を用い、生徒が授業を行う 菊池 有紗（附属中学校）

①使用教材：NEW CROWN 2 (p.62, 63) Lesson5 USE Read “Uluru”

②めあて：「各段落の読解を担当し、班員にわかりやすく授業をする。」

③指導計画：

第1時限	全文を通してリスニング。おおまかな内容をペアで確認する。 班で1～4段落を担当に割り振り、エキスパートグループに分かれ、読解をする。
第2時限	エキスパートグループで相談しながら、1人あたり8分の授業を作る。 授業資料も作る。(iPad、フラッシュカード、ワークシートなどを作ってもよい。)
第3時限	ホームグループに戻り、用意した授業を班員に対して行う。 余った時間は希望者を募り、クラスの前で授業を行う。

④評価方法：本文全文のワークシート（※班員の発表を聞いてメモをするシート）等

生徒の授業への感想によれば、「同級生が作った授業」というものは印象に残りやすく、聞こうという気持ちを起こさせたようである。また、普段授業に集中することが難しい生徒も、授業を作る際には残りの班員のために頑張る、という気持ちが働くのか、エキスパートグループでの活動に一生懸命に取り組む様子が見られた。

生徒の中には、手製のワークシートや確認問題プリント、もしくはフラッシュカードを作ったり、教師に発音を確認し、読み聞かせの練習をしたり、iPad(キーノート)を用いてスライドを作成したり、と様々な独自の工夫を凝らす生徒が約3分の1は確認された。英語の能力だけでなく、自分の持てる総力を駆使して授業をわかりやすく伝えようというモチベーションは、やはり同じ班員に行うという責任感から来るものだと考察される。

実践の成果を裏付けるものとして、定期テストの読解問題で正答率が向上した。各単元の USE Read に関する定期テストの結果を比較すると、上記の授業実践を行った単元の方が、問題演習のみで行った単元よりも、内容を良く理解していたことが明らかになった。

○生徒が自律的に学び合う授業づくり 高瀬 麻美子（附属中学校）

授業で特に大切にしていることは、生徒が活動する時間をできるだけ多く確保することである。そのため教師の説明は極力シンプルに短時間で行い、生徒が自ら考え、自律的に学べる授業作りを心掛けている。個人で考えたことをペアやグループでシェアする、リーダーに進め方を伝え、自分たちにあったゴールを設定させ、メンバー全員が達成できるようにするなどの方法は常時取り入れている。今年度はさらに生徒の自律学習力を伸ばすため、生徒（今年は英語係）が、授業前に Today's Goal と Things To Do を事前に板書し前に出て授業を進めるスタイルで、2クラス同時進行（教師は廊下で2クラスの様子を観察）の授業を数回行った。一定の手応えがあったが、さら

に改善の必要性を感じた。

以下に、今年度行った生徒の協同と自律学習を意識した活動をいくつか挙げる。

帯活動

授業初めにいくつかの活動を帯活動として取り入れている。主に学習中の内容の定着・強化、以前の学習の復習として行うが、その日の学習内容の導入として行うこともある。

- ・即興的に話す力を養う活動
- ・英語のイントネーションや聞く力を養う活動
- ・語彙の定着のための活動

教科書の内容を扱った活動

- ・ペア、グループ音読練習：自分たちで決めた音読の Goal 達成を目指す。
- ・ディスカッション：ペア、グループ、全体で意見交流する。
- ・Skit：ペアで教科書の対話文を発展させ、オリジナル対話を作り演じる。

表現活動

- ・Find odd one：4つの単語のうち仲間外れの単語を1つ選び、理由を説明する。
- ・絵カードゲーム：グループでカードに書かれたイラストについて説明し、あててもらう。
- ・Presentation：iPadで作ったスライドを見せながら、小グループや全体で発表し、評価し合う。

○ タブレット端末を活用した協同的な活動 元岡 未薫（附属中学校）

Google Earth を活用したツアー計画の作成

BYOD(1人1台のタブレット端末)が今年度から始まった。そこで、地図ソフトの Google Earth を活用して自分たち独自のツアー計画を作成させ、各地の説明を日本語と英語で記入し、発表させた。はじめは班でツアーを作成し、その後自分独自のものを作った。班で作成させることにより、作成方法を協力し合いながら、学び合いも自然に起こり、作り方を習得していった。

英文作成に関しては、既習の表現方法だけでは難しいため、適宜 ALT と元岡が助言した。生徒たちは、スライド以外でもプレゼンテーションを行う方法があることに気づき、Google Earth を使用したリアルなツアー計画を作成することで、英語で表現することへの抵抗が減少し、自然に英語を使用している姿が見られた。

成果と課題

タブレット端末によって、ネイティブの生の発音を自分のペースで聴くことができるようになったため、音読練習への意欲が高まった。また、主体的に英語を聴くことにより、より英語らしい発音を心掛けて音読する生徒も増えた。一方で、タブレット端末を使うことが自己目的になる活動になる場合もあり、タブレットなしでもできる効果的な授業づくりを忘れてはならないことを再確認した。タブレット端末は一つの学びのツールとして限定的に活用することが大

切であり、効果的な活用方法をさらに研究していく必要がある。

4. 考察と課題

本研究チームでの実践に加え、各地の学校での観察を踏まえて、以下に考察を述べる。

文部科学省が新学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び」を打ち出したこともあり、学校現場では協同学習に対する関心が極めて高く、すでに多くの研修会や授業研究会が行われている。授業の冒頭で「目標 (Today's goal)」や「授業の流れ (procedures)」を書くなど、生徒の主体性を喚起する取り組みも見られるようになった。

協同学習の導入によって、まず教室内が「しっとり」とした学び合う空間に変容し、時間差を伴って学力が向上する。本研究グループでも、協同学習による意欲と学力の向上、学力格差の縮小などが確認できた。

他方で、伝統的な教師主導／生徒受動による一斉講義型の授業スタイルを、生徒主体の協同的な学び合い重視に転換させることに苦慮している学校も多い。学校全体の改革には、教員間のビジョンの共有、校長のリーダーシップ、外部講師の助言が必要で、3年程度かかる事例が多い。

協同学習は、机を合わせるだけの「形」ではなく、生徒同士の関わり合う関係性と、学びのワクワク・ドキドキ感に満ちた「協同する必然性」を組み込んだ課題設定が重要である。たとえば、「関係代名詞の使い方を理解する」ではなく、「関係代名詞の使い方を理解し、他者にわかりやすく説明できる」や「関係代名詞をなるべく多く使い、班で自分の町の魅力を外国人に説明できる」の方が協同性を高めやすい。生徒同士が関わり合い、高め合う必然性を組み込むことによって、 $1+1+1+1=4$ ではなく5にも10にもなるグループダイナミクスが引き出されるのである。

協同的に学び合う関係作りのためには、お互いの意見を聴き合い、わからない子が「ねえ教えて」と気軽に尋ねられる「学び合い」（「教え合い」ではない）が大切であり、間違いを楽しめるような (enjoy making mistakes) グループ内・教室内の信頼関係を形成することが重要である。その土台作りとして、チームビルディング活動による信頼醸成のための活動が、特に新学期や新たなグループ編成の当初に不可欠である。

協同的な学びの形態としては、男女混合の4人程度のグループ編成が一般的だが、それがときとして同調圧力や息苦しさを招く場合もある。そうした場合には、自由な「立ち歩き」を認め、個人、ペア、グループといった学習形態やメンバーを自由に選ばせることで、学ぶ意欲を喚起することができる。ある高校では、教室外の任意の場所での学びも認めることで、主体的に学びに向かう力を発揮させていた。学習形態は柔軟に考えるべきであろう。

協同学習に対する経験不足ゆえの不安がまだ根強く、改革に踏み切れていない教師や学校も少なくない。特に、学校が安定しており、生徒の成績が良好な学校では教師の危機意識が乏しく、改革への意欲が低い場合が多い。逆に、危機意識は高いが、生徒指導等に追われて授業改革に注力できない学校もある。だが、質の高い授業づくりこそが、最高の生徒指導である。

授業改革の意義と必要性を共有化するとともに、教師の多忙化を緩和し、協同的な授業づくり

と指導者育成のための研修時間の確保が急務である。また、教員養成段階での協同学習の原理と方法の習得と、そのための大学授業の講義形式から協同学習形式への転換が必要である。